

2011年6月30日

ドイツ情報・・・ベルリンにて

川西重忠

ベルリンに来て3ヶ月目になります。いつもメールと情報提供、ありがとうございます。各種のテーマでエネルギーに活動されているのを遠望し、且つ創立から100回を大分超える会合のお知らせを見て、持続的に良くやられるものだと感心し敬服しています。

前回、A41枚でよいからドイツ情報を定期的に書き送ってほしいと依頼を受けたものの、何を書いて良いのかわからない上、期待に沿う内容は難しいだろうと思い放っていましたが、今日はこちらに来てからの出来事とその印象を簡単に記して送ります。

1. ドイツにおける中国 Made in China の実態

先週末のテレビのドイツ放送はほぼ1日、中国の温家宝首相のベルリン訪問について放映していた。国会での温家宝首相とメルケル首相の挨拶では両国の良好な関係が強調された。翌日の新聞ではフロントページにドイツと中国の緊密な関係、特に経済面についてフォーカスを当てた報道が目についた。例えば、エアバスの購入、ホルクスワーゲン、ダイムラーベンツとの商談など、いずれも千億円単位の金額が並び、ベルリンザイトング紙などは「中国のショッピングツアー」のタイトルでの報道であった。

ベルリン自由大学の教え子によると、最近、いろんな国から各国首脳がベルリンに来るので（フランスのサルコジ大統領、アメリカのオバマ大統領夫妻など）中国の首相が来ても珍しくはないが、中国がドイツとの貿易で最大の相手国であることは今回の報道で初めて分かったと中国の存在感を身近に感じたようである。

人権問題に厳しいドイツであるが、今回は中国の人権問題に触れることはなかった。

6月初旬にベルリンからジュッセルドルフに所用で出かけた。その帰途、近郊にあるゾーリンゲンに立ち寄った。ジュッセルドルフから20分くらいの距離の小都市である。

刃物で有名な町で1000社にのぼる刃物企業があると聞いていたので記念に小型の刃物を買って出かけたのであるが、駅前から続く商店街を2,300メートル歩いても刃ものを売っている店が一軒も見当たらない。ようやく商店街の外れに家庭用品の大きなお店を見つけ鋏と小物器具を購入した。価格が2ユーロと安いので、モシヤ、と胸騒ぎがして、後ろのタグを急いでみたら、なんとやはり「made in china」であった。

刃物の町ゾーリンゲンまでわざわざきてメイドインChinaの商品を買って帰るとは正に予想外（没想到）の安くて高い買い物であった。大学の教え子にそのことを話すと「ドイツでは一般に日本のようにその町の特産品を商店街で売ることはしない、土産品として販売を考えていない。またドイツ人はそれを買うためにわざわざ出かけたりはしない。刃物企業はゾーリンゲン駅から離れたところにある」と教えてくれた。

先週末（6月25日）に全国ドイツ若者による「日本語スピーチコンテスト」があった。

各地区予選を勝ち抜いてきた8名による決勝戦が日本大使館で開催された。全国の地区予選を勝ち上がった若者、といっても殆どその地区を代表する有名大学の学生である。今回もハイデルベルグ大学、ケルン大学、ハンブルグ大学、チュービンゲン大学、ライプツヒ大学等の各地域を代表する大学の選りすぐりが集まった。ベルリン地区はベルリン自由大学の私の教え子であった。各大学とも日本語の先生（ほとんどが日本人女性教師）が大学の名誉にかけて優勝を狙い、学生を引率してやってくる。優勝者には名誉の賞状のほかに日本への往復航空券が副賞として支給される。

優勝したのはベルリン自由大学1年生の私の教え子、ルーゼであった。自製の着物姿で登場し見事なスピーチでの優勝であった。内容は、高校時代に留学した八戸のホストファミリーとの震災時のコミュニケーションについてであった。

審査委員長の紳余大使によると、今回は審査でも伯仲して1、2位が甲乙つけがたく今回に限り2名の優勝者となったようだ。もう一人はライプチヒ大学の中国人留学生であった。彼のスピーチはやはり東北大震災についてであった。ドイツ語と日本語を独学で学んで完璧に話し全ドイツの日本語スピーチコンテストで優勝するとは、なんとという才能であろう。正に躍進する中国の将来を象徴しているようである。

2. 日本原発報道に対するドイツ人の対応とマスコミ報道について

先日、ドイツの日本東北大震災について、南ドイツ新聞の記者の報告があった。報告者が日本で震災記事を送っていた記者であるということで、大きな教室は学生で溢れかえった。それほど学生たちの、いやドイツ人の日本での震災、原発に対する関心は今でも高い。特に1986年にチェリノブイリ原発事故で直接降襲による被害をこうむったドイツ人は原発に対しては極端に過敏である。福島原発直後の地方選挙では政権がひっくり返り、マイノリテイ野党の「緑の党」が第1党を占め政権を手中にするという大逆転劇まで起きた。やがて行われるベルリン市長選でも「緑の党」の候補者が勝利する可能性が高い。メルケル首相は原発延期の決定を覆して2020年には原発廃絶を公約して挽回を図っている。それほど福島原発事故はドイツの政局に大きな影響を与えている。

最近のメルケル首相の国会での演説では14回も「フクシマ」の言葉が出たが、これはオバマ大統領の就任演説の「CHANGE」の7回の倍にあたり、いかに「フクシマ」が

ドイツの政局のカギを握っているかを如実に表している。今のドイツの日本イメージはかつての「フジヤマ ゲイシャ」から完全に「フクシマ ゲイシャ」に代わっている。

ただ、あまりの原発中心の報道姿勢には、ドイツの中でも批判が高まり反省が見られる。

実際大震災があった2日目以降は福島原発一色になり、紙面は「日本崩壊」「カタストロフィー」のオンパレードであった。報道とドイツ政府とルフトハンザのとった対応も他の国に先駆けた極端な例としてドイツ人の間から反省の声が上がっているのも事実である。

ただ、「菅首相は良くやっている」と南ドイツ新聞の記者が報告会で言い、周りの殆どの在住日本人とドイツ人が同様に言うのは日本での評価と大分違うのではないだろうか。

(筆者は桜美林大学教授で現在、ベルリン自由大学客員教授)

以上